

前回取り上げた中内唯一の国指定重要文化財の龍禅寺三仏堂と、埼玉県本庄市児玉町にある成身院の不思議なつながりを、今回は紹介します。

成身院は古い由緒を持つお寺ですが、何度も火災に遭い、また住職がいらない時もあった、創建時の詳しいことは、分からなくなっているようです。

現代成身院の境内には百体観音堂と呼ばれるお堂があり、本庄市の指定文化財になっています。

百体観音堂は3階建てで、内部は一方通行に順路が設定され、上り専用と下り専用の階段がある「さざえ堂」になっています。取手市内長禅寺の三世堂茨城県指定文化財と共に、全国に5棟しか残っていない「栄螺堂」の一つです。

この百体観音堂の2階に、釈迦如来・阿弥陀如来・薬師如来の三体の仏像(本庄市指定文化財)が、安置されています(写真)。



この内、阿弥陀如来像の胎内(仏像の内側)には、応永12年(1405)10月に「総州下総国北相馬郡黒崎郷米井村」の龍禅寺が、この仏像を制作したと書かれています。「米井村」は、取手市内米ノ井と考えると、間違いないでしょう。また、応永12年から15年たった天文15年(1546)に、修理されたことも書かれています。

釈迦如来像の胎内にも、応永12年から15年たった天文15年に、修理されたと書かれていて、釈迦如来像も龍禅寺の仏像として制作されたものが、何らかの事情で、成身院に移されたと考えられます。

さらに龍禅寺本堂の十一面観音像の胎内には、明德3年(1392)3月15日に、人仏師了阿弥陀仏が制作したと書かれています。なんと成身院の阿弥陀如来像の胎内にも、作者は仏師了阿弥陀と書かれ、龍禅寺の十一面観音像と、成身院の阿弥陀如来像・釈迦如来像の作者は、同一人物といえます。

龍禅寺の仏像が成身院に移された理由を知りたいところですが、残念なことが、今となっては分かりません。

塙保己一(はなわほきいち)記念館

立ち寄りませんが、江戸時代盲目の国学者塙保己一の生誕の地であるので記念館があります。

塙保己一、延享二年端午の節句日(1746)児玉の百姓宇兵衛の子として嫡男、七歳の時に眼病で失明してしまします。十五才で江戸の雨富検校(あがとみけんこう)の才量と援助により学問の道に進進することが出来ました。

保己一24才の時、加茂真淵(かもまぶち)の門下となり「六国史」を学び、保己一の一生に関わりをもち、生涯を捧げる結果となるのでした。

38才で検校(旗本と同格の位)となり、水戸藩の依頼により「参考源平盛衰記」、「大日本史」の校正を行いました、更に、国学の研究の為に、和学講談所を設立しました。

保己一の功績は、生涯をかけた「群書類従(ぐんしよるいじゆう)」であります。後世に残さなければならずと自らの使命感によって、古代文献の校正と分類を編纂し刊行しました。群書類従は既にご存知と思われませんが、全約一千巻という、日本最大の代表書物として諸外国にも紹介されています。

ヘレン・ケラーの来日などに、保己一の功績の一端が伺えるのも、盲目故の偉人に対する尊敬の念があったと伝えられています。

群書類従家系部に「下総国新木村住人二相馬蔵人在アリ」とあります、相馬一族の蔵人(くろうど、蔵を守り管理する役人)が居た。相馬霊場七十七番で既に紹介しています、

新木城跡の城主で「東国戦実録」記の田口内蔵

之助「雁金山の合戦」は取手の地名となった大鹿の砦城主の弔い合戦の情景を描写した書物です。

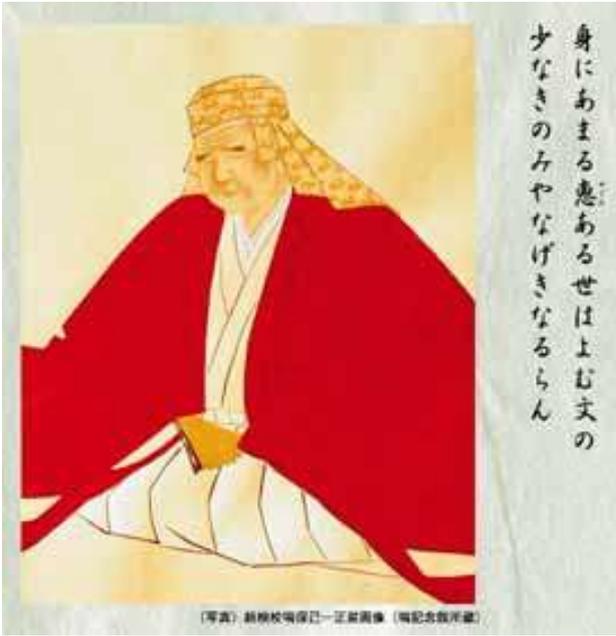
般若心経巻数張は、二百二万回繰り返し、経典を暗記する手法帳で、小さな自筆の携帯手帳でした、空海が修行道具とした「虚空蔵菩薩求聞持法」に通じる暗記手法に同。

享年七十六、文政四年九月十二日没。

群書類従続編は、未完でしたが、現在、数千巻にのぼる書物として完成しております。

渋谷道玄坂の塙研究所に、群書類従の版木が残されています。

保己一の旧宅は、現在でも居住しておられる為に拝観は出来ませんが、児玉城跡である桜の城山公園内に、塙保己一記念館が佇んでおります、拝観無料。



埼玉県指定文化財

競進社(きょうしんしゃ) **模範蚕室**(さんしつ)

〒八高線児玉駅から3分の所にあります。

競進社は、このほど世界文化遺産に登録された「高山社跡」の高山社と深い関係にあり、競進社を創始した木村九蔵は、高山社を創始した高山長五郎の弟にあたります。長五郎は「清温育」、九蔵は「一派温暖育」という蚕の飼育法を考案しており、両者は切磋琢磨しながら近代日本の養蚕業の進展に大きな役割を果たしました。

高山村(現藤岡市)の高山家から児玉郡新宿村の木村家に養子に入った九蔵は、飼育法や新蚕種を普及させるため、明治10年に賛同する若者たちと養蚕改良競進組を結成し、明治17年にはその組織を拡大し、児玉町に出張所と伝習所を設置し、その中に実習施設として現在も残っている「競進社模範蚕室」を造りました。明治27年のことです。九蔵は、明治31年に54歳で亡くなっていますが、その前年には、現在の児玉白楊高校の前身となる競進社蚕業研究所を設置し、児玉白楊高校の校祖と呼ばれています。

高山社も高山組から高山社(明治17年)、高山社蚕業学校(明治34年)へと変遷し競進社と同じような歩みをしています。

世界遺産富岡製糸場と本庄の繭(まゆ)市場

「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」(国登録有形文化財)は、日本屈指の繭市場を本庄の面影を今に伝える貴重な建造物です。

明治5年の富岡製糸場設立に当たり、工場長の尾高惇忠(渋沢栄一の義兄)は、当時の本庄宿の有力

者諸井泉右衛門らに繭の買い入れを依頼し、以降本庄は、北関東のみならず日本屈指の繭の集散地へと成長して行きます。

明治27年には、この地初の銀行「本庄商業銀行」が設立され、29年には、取引や融資の担保となる繭を貯蔵する煉瓦倉庫が建設されました。これが現在も中山道に残っている「旧本庄商業銀行煉瓦倉庫」です。



鎌倉街道上道(かみつみち)の児玉町部分地図、



「上道」は鎌倉を出た後、境川沿いを北上し多摩丘陵を越え武蔵国府(府中)に至り、その後武蔵野台地から比企丘陵をぬけ、群馬県の藤岡に入り高崎付近に出ます。その後、信濃方面と越後方面へと向かったルートです。児玉では熊野神社方面の上道と町役場方面の上杉道に稲荷社で分岐します。小山川の土手には「**児玉千本桜**」の老桜が咲き乱れ見事な景観を満喫出来ます、勿論歩くべきです。

